



新春特別編



代表する約500の企業、東京慈恵会や日本赤十字社、聖路加病院、商法講習所（二橋大学）、大倉商事学校（東京経済大学）、國士館、日本女子大学校（日本女子大学）など社会公共事業約600の設立・經營に関与し、「日本資本主義の父」と呼ばれている。代表作は道徳經濟合一主義を提唱する『論語と算盤』。ノーベル賞候補にも2度選ばれている。一方、栄一の5代目子孫に渋澤健がいる。日本で生まれたが、父親の仕事の関係で小学2年から大学までをアメリカで過ごす。就職で帰国したが、UCLA経営大学院でMBA取得のため再び渡米。その後、外資系企業でニューヨークと東京を股に掛け、株式やデリバティブルなどを担当。40歳で大きな転機を迎える。結婚して長男と妻のお腹に次男ができる一家を支える責任から日本で独立を決意。一家の書物に触れ、初上梓の『渋沢栄一とヘッジファンドにリスクマネジメント』も脱稿。

「衝け」。その主人公は2024年の紙幣刷新で1万円札の顔にもなる渋沢栄一。国立第一銀行（みずほ銀行）や東京瓦斯（東京ガス）、東京海上火災保険（東京海上日動火災保険）、田園都市（東京急行電鉄）、麒麟麦酒（キリンビール）、東京証券取引所といった日本を

# 統合一「論語と算盤」の時代

『のためにリスク・マネジメントが必要』と算盤』はサステナビリティ（持続可能性）を説いていると確信。「平和は当たり前にあるものではなく、自分達で作り上げなくてはいけない」。9・11で渋澤は目が覚めた。

「高祖父・栄一のことは幼少期にポプラ社『渋澤栄一 実業の父』を読んだ程度です。父親の親戚の集まりで叔父から栄一が著した『渋澤家の家訓』の存在を聞き調べると、「投機の行、または道徳上卑しい職に就すべからず」とあり、それまでの株式やデリバティブ

そんな時、二〇一〇一ヶで九・一一同時多発テロが起きた。「私はシアトルにいて青い空を見上げながら、自分の心にのしかかる重たい雲を感じました」。その後に出版された著書は「渡沢栄一リスクマネジメント」の組み合わせで、「栄一はリスクマネジメントの達人だった」の設定、一般的なリスクマネジメントをイメージしていたが、九・一一で人類のこの二面性が現れた（参考）。



今春リニューアルオープンする  
造沢史料館（東京都北区）

の仕事か『投機』に当たると気がきました。その後、東京で起業するとともに公益財團法人人渢澤栄一記念財団（渢澤雅英理事長）の理事に就任。栄一の伝記としては城山三郎の『雄氣堂々』がよく知られ、埼玉・深谷での妻・千代との祝言から死別までが描かれている。それ以降を収録する本編全58巻、別巻全10巻の『渢澤栄一傳記史料』を解説。「今から100年前の内容ですが『事なき主義』に陥っている』人々が何でも慎重な態度になつてゐる』『すぐ国に頼る』『物質的な豊かさは先進国にある程度追いついたが精神的にはまだまだ』など現代にも通じる話です。栄一は子孫に財産を残していませんが、貴重な言葉に触ることができます」。

逆転してあります。格の外新しい環境にチャレンジすることで、自分達がまだ気づいていないスイッチがオンになると思います」。  
渋澤は「論語と算盤」の「と」を強調する。「世の中には『か（o r）』か『と（a n d）』」があります。『か』では〇か1、黒か白かを比べ効率性を高めます。買い物でも価格で選ぶ場合に有効ですが、それにはクリエーシヨン、新しい創造がないと思うのです。一方、『と』の力は『論語』と『算盤』のどちらが先か悩みますが、粘り強く試行錯誤を繰り返すと両者がフィットします。話題のAI（人工知能）は『か』の力で有効でも、創造性を伴う『と』の力を発揮できないと思います」。  
渋澤は経済同友会の幹事・アフリカ委員会会

『そんな栄一』が最も影響を受けたのは、両親と従兄で義兄の尾高惇忠という。「父親の重郎右衛門は美直。渋沢家へ養子に入り栄一に『論語』を読ませ、長けた商才で廃れていた一家を立て直しました。『論語と算盤』の原型」と言えます。母親エイは病氣や貧しい人にも情愛がありました。思想的には惇忠の私塾で私淑。そんな環境のもと栄一は好奇心旺盛に育ち、攘夷思想の急先鋒ながら徳川慶喜に仕官し西洋の力を認めると、幕府の中心で活動

逆転してあります。格の外新しい環境にチャレンジすることで、自分達がまだ気づいていないスイッチがオンになると思います」。渋澤は『論語と算盤』の「と」を強調する。「世の中には『か（or）』か『と（and）』があります。『か』では〇か1、黒か白かを比べ効率性を高めます。買い物でも価格で選ぶ場合に有効ですが、それにはクリエーション、新しい創造がないと思うのです。一方、『と』の力は『論語』と『算盤』のどちらが先か悩みますが、粘り強く試行錯誤を繰り返すと両者がフィットします。話題のAI（人工知能）は『か』の力で有効でも、創造性を伴う『と』の力を発揮できないと思います」。渋澤は経済同友会の幹事・アフリカ委員会副委員長として、昨年初めてアフリカの土を踏んだ。「これからアフリカは人口が急増、世界の4分の1を占めます。米一が存命ならアフリカへ進出すると思います。アフリカが求めれる技術やノウハウ、経験、制度を日本が持っているからです。アフガニスタンで銃弾に倒れた中村哲医師のようにMade with Japan、現地の人と一緒に取り組めばいいのです」。今こそ「論語と算盤」の哲学が求められる。

しました。徳川昭武の随行でヨーロッパを訪問し、外国の国王と商人が対等に接し豊かな社会を築いているのを見て、階級制の打破と実業的地位向上の必要性を痛感したのでしよう。民の立場でも国のために取り組めることがあると、スイッチが入ったようです」。

渋澤は続ける。「それが現代の若者への大切なメッセージと思うのは、人間は自分に対しても甘く、一番居心地のいいコンフォートゾーン（安全地帯）にいるものです。そこに留まっていると、枠が小さくなってしまいます。日本のGDP（国内総生産）は30年前と同じです。日本が留まっている間に途上国が

かまだ気づいていません」。アフリカが「新しく環境に适应する」と思っています。

一口ツバを訪  
に接し豊かな  
級制の打破と  
したのでしょ  
り組めること  
うです」。

如上所述，是谓天道。是故一而能统